

## 論文の和文要旨

### 論文題目

大江健三郎研究  
—「死と再生」という主題をめぐって—

### 氏名

南 徹 貞 (ナムフィジョン)

本研究は、大江健三郎の代表作を「死と再生」の主題を中心に、現代日本の思想的な背景につながる諸問題について考察したものである。大江作品において、彼の思想的な背景として「谷間の村」「想像力」「ヒロシマ・沖縄」「性的人間・政治的人間」「ユートピア」「障害児との共生」などが主な論点として論じられてきた。そのなかでも「死と再生」というテーマは、大江文学に限らず、古今東西の哲学や宗教学を問わず扱われてきた普遍的な問題であろう。半世紀を超えて数多くの小説のなかで「死と再生」に対する独特のイメージ構築を通して大江は時代状況を巧みに表現してきており、彼は学生時代に創作を始めて以来現在まで「日本と日本人」という問題意識を持って作品をつむぎ出して来た。さらに、その中心には核兵器の脅威に晒されている現代文明の悲劇があり、「ヒロシマからフクシマへ」という核時代の危機意識がある。「3.11」という悲劇は、人類の歴史に類をみない「複合災害」であったが、この悲劇の予言のような世界が描かれている『治療塔』(1990)で核戦争・原発事故によって地球の自然環境は破壊され、食糧不足、「新しい癌」の出現、資源の枯渇、エイズの蔓延といった難問が継起し「地球の死」が迫る。『治療塔』で人間が生きる世において想定される最大限の危機的状況が描かれている。大江作品において生き延び続ける人間と社会の「死と再生」の諸相は、「3.11」以後の生き方を示唆している点で大きな意義を持っている。

序章では、大江作品において「死と再生」が特別な主題である所以を、三つの観点から論じた。まず、『個人的な体験』(1964)以後の作品における傾向について、「障害児との共生」というテーマに基づくさまざまな「光」像が登場している点を指摘した。『個人的な体験』から始まり、『万延元年のフットボール』(1967)の「赤んぼう」から『洪水はわが魂におよび』(1973)『新しい人よ眼ざめよ』(1983)『人生の親戚』(1989)といった70年代、80年代の小説では「光」像の成長の姿が描かれており、『治療塔』(1990)においては老人になった「光」は、大江文学の本質的なものを象徴的に表している。次は、私小説性や宗教性の関連性について論じた。大江作品における「死と再生」というテーマは、『聖書』やブレイクの詩が媒介となったキリスト教的な神話的枠組みから派生したものの、「核の冬」が象徴する「死」という危機的な状態や、「生命の春」という言葉の「再生」のイメージが大江的な主題に繋がっているからである。最後の理由としては、「核時代の危機」から「再生」の道を探るプロセスを、「3.11から読み直す」大江文学から見出すことができるからである。

第一章では、『個人的な体験』の作品分析を行い、「死と再生」という主題の「原点」として位置づけ

た。「私小説」的な方法が用いられているものの、『聖書』を媒介にした「子殺し」という神話的な世界が、「多元的な宇宙」といった宗教的なモチーフにつながっていることを明らかにした。『個人的な体験』のなかで子供を殺すか生かすかという問題があり、「子殺し」のモチーフが登場する。この小説ははたして倫理的な問題を扱っているのだろうか。もしくは、作者がいうような「信仰告白」のような小説であろうか。小説のなかで重層性をもつ「劇的なもの」の意味について追求する必要があると思われる。小説家として出発した早い時期からいわば「戦後民主主義の旗手」と呼ばれた大江だが、『個人的な体験』の世界では社会から遠く離れ、火見子の家に閉じこもり「多元的な宇宙」における「私」の重みを描いている点で注目される。20世紀の人類が核兵器の正体を初めて知ることになって以来のその時代像と「私」の問題を描くこと、大江作品の核である二つの問題がこの小説を原点として大きな転換期を迎えたことを指摘した。

第二章では、『万延元年のフットボール』（1967）を中心に時代感覚と想像力の「再生」表象について、『水死』（2009）の主題と比較しながら分析した。大江の60年代の「憂鬱な状態」が、『万延元年のフットボール』の作中人物たちに投影されており、時代感覚を表現していたことを明らかにした。そこから大江がいう「乗り越え点」としての小説が産まれたのは、歴史に対する「想像力の再生」の主題が描かれている点で必然性を持っており、重要な作品であることを指摘した。『万延元年のフットボール』では冒頭の一文が小説の全体につながる重要な仕掛けとなっている。「熱い「期待」の感覚」は、「内臓を燃えあがらせて嚙下されるウイスキーの存在感」という比喻表現として描かれており、「熱い「期待」の感覚」を志向する蜜三郎の意識は、最後に描かれる〈家族〉という自分の居場所を見出す結末と呼応しているところである。「死者」となった100年前の「故郷＝谷間の村」に生きた先祖たちとの交感、コミュニケーションの場として「森・谷間」という空間が提出されており、伝説の再生、想像力の再生の舞台として表現されている。小説の冒頭から死者によってこの物語は展開されており、現代人の魂の救済というテーマが提示されているのである。

第三章では、『洪水はわが魂に及び』における「過渡期」の意義や「宗教的な経験」について論じた。1970年代にアニミズムという宗教的な要素が入り込むことで、彼の文学世界がまた大きな変貌を遂げることに着目し、「祈り」「<sup>ヴィジョン</sup>幻」「教育」という「言葉の感覚」という問題や、同時代的な状況に潜む喪失感と「宗教的感覚」から、過渡期の様相があることを明らかにした。終末観と1970年代の国際政治的背景が暗示されている『洪水はわが魂に及び』によって、大江は小説家として一つの転換期を迎えた。「洪水」のイメージは、『旧約聖書』の「ノアの洪水」という終末的な危機を連想させており、「大洪水後ノ再生スラ信ジヌ者」という一節から必然的に「ノアの箱舟」という「再生」のイメージに結びついているのであろう。佐藤泰正は「作者もまたひとりの預言者、危機の通告者たれということか。〈洪水〉、あのノアの箱舟とは大江氏のなかでは〈ヒロシマ〉につながる」としている。大江文学の系譜において、核時代の象徴としての「ヒロシマ」をめぐる彼独特の主題は、「障害児との共生」というテーマとともに繰り返して描き出されている。

第四章では、『新しい人よ眼ざめよ』を取りあげ、80年代の神秘主義的な傾向や主題の関連性について論じた。この小説が強く宗教性を感じさせる理由は「光」像の変貌にあり、目まぐるしく変化する80年代を背景にして創作動機と関わっていたのである。ブレイクの詩から引いたという「新時代」「ニューエイジ」という言葉が、「凶々しい核の<sup>ニューエイジ</sup>新時代」という当時の時代像に抗する神話的な世界によって導かれている点を指摘した。ブレイクの詩から引用した「Rouse up, O, Young Men of the New Age!」とい

う一節が『新しい人よ眼ざめよ』の締めくくりになっているが、「人間の死と再生」ということを宗教性の強い詩の引用によって「イーヨー」に投影させて表現したのである。このような「新しい人間となっていくか帰ってくる」という発想には、イエス・キリストの復活やその「人間性」を強調したブレイクの思想があるといえる。

第五章では、『人生の親戚』の悲劇のヒロイン・倉木まり恵をめぐる「悲しみ」の主題と、主人公たちが、「性」と「聖」の暗喩を通して、「悲劇の表現者」としての機能を有している点を明らかにした。さらに、大江自身を思わせる語り手「僕」というもうひとりの「悲劇の表現者」を通して神話的な女性のイメージを描きながら、作者の実経験から取り上げられた諸問題をめぐってこの小説が「私小説」的な方法で書かれた理由を指摘した。大江作品の系譜においては珍しく女性が主人公として登場しており、障害児たちの自殺から触発された「再臨」という言葉の意味が、宗教的な傾斜とともに「死と再生」の主題性が色濃い小説である。

第六章では、『治療塔』における「危険の感覚」や「3.11」との関連性について論じた。核兵器による「人類の絶滅」という危機意識、そして「無力感」は、『治療塔』を通して核戦争による滅びて行く地球の未来像のなかによく表れている。この徹底した「無力感」こそが、人間を超える存在としての「神」を考える契機になっている点で、現代社会において、文明に対する不信感や批判精神が、古代の人類から受け繋がれてきた「宗教」という非科学的な民間伝承の方に逆行する傾向を見せる作品として、その可能性を提示した。「3.11」後の座談会のなかで「新しい人」という言葉についての発言であるが、大江はその意味をブレイクの詩を介して「未来の人間」として捉えている。それを、もっとも象徴的に表わしている媒介になるのが、大江作品の系譜における「光」の像であろう。『治療塔』では、この二人が世間から逃れる場所として北軽井沢という空間が設定されているが、そこで老年の「ヒカリ」が共同体のなかで暮らす場面から、瀕死の地球のなかで、障害を背負いながらも生き延びることができた未来の「光」の像が肯定的に描き出されている。この作品は、大江作品では珍しく女性の語り手を通して、違う境遇の二人の男女の恋愛に主な焦点があてられていることが注目される作品である。そして新しい命を身ごもろうとする決心は、危機を認識しながらも、新しい命に対する希望を失わず「再生」への可能性を表している。ここには、核時代の危機を描きながらも「意志的な楽観主義」を失わないという、作者の思想が反映されていることを明らかにした。

終章「大江健三郎における「死と再生」の原理」は、『個人的な体験』以降の「死と再生」の主題のなかに見出したものの実質を明らかにし、キリスト教思想家たちから受けた影響について考察した。矢内原忠雄は「原子力時代の思想」を主題とした「東京大学教養学部駒場祭講演」（1957）で不安な核時代に人間の魂はいかに救われるのか、キリスト教思想の根本にあるイエス・キリストの存在を通して述べられている。「原子力時代の危機」という現代の問題を問うことに積極に取り組みながら、キリスト教の『聖書』の教えを中心とした「宗教」の問題を巧みに結び付けているのが、矢内原の主な思想的な核心であるといえよう。このような考え方は大江の「核時代の想像力」という概念と大きく異なる性格ではないと思われる。なぜなら、大江は矢内原がいう「人間自体に対する観察と実験と分析」するための「宗教」の代わりに、文学の世界の「想像力」を主な根底におきつつ、「現実性」を重んじる姿勢をとっているからである。大江における「死と再生」の主題の実質は「光」の物語を通して、暗闇の中の希望、「核の新時代」における「再生」の可能性を模索することにあった。